夕刊
磐城新聞
三月五日發行
定價 一ヶ月金五拾錢 郵税金六拾錢
廣告料金 一行金五拾錢 一回金六拾錢 一行二字詰 五號十二字詰 一行金九拾錢 但常傳定
編輯兼發行人 磐城郡平町 木村
印刷兼發行人 磐城郡平町 木村
發行所 磐城郡平町 磐城新聞社
電話 平五番 平二五番 平五四番 平五六番
（日曜祭日翌日休刊）

童話　峠みち　上

千葉省三

青馬の背の兩わきに、炬燵やぐらをひとつづつ、綱で結びつけて、右の方へ私の方へ妹のおやすがのつてゐました、お母ちやんは、眞中の鞍にまたがつて、日草場を横切つたりして進んで行くやつなどもありました。

私は、やぐらの縁につかまつて、いつかうと〳〵とゆられていくのでした。

左の方へ妹のおやすがのつてゐました、お母ちやんは、眞中の鞍にまたがつて、日草場を横切つたりして進んで行くやつなどもありました。

除けに、大きな麥わら帽をかぶつてゐました。

けはしい峠道でした、きたない手拭で頰冠りした六爺が、手綱をひいて先に立つて、そのあとから、もつくり、もつくり青馬が上つていくのでした。青馬の首に出ました、頂といつても見晴しひとつない。さびれた峠でした。一面の熊笹の上に、ひつそりと日が當つてゐました。

私たちは、もと茶店があつたといふ、熊笹の中の空地へおりて休みました。そこで、用意して來た瓶の水をのんで、海苔卷をたべました。六爺も、頭のやうに大きな握飯を出してたべはじめました。

ふいに、後の道もない熊笹の中を、ガサガサ押しわけて、一人の男が出て來ました。汚ない着物を着て、草鞋をはいた、眼のギョロンとした男でした。片手に何かはいつた大きな袋をさげてゐました。男は、ヂロヂロ私達をながめてゐましたが。

『飯があまつたら、食はせてくんねかね』

と、ニヤニヤ笑つて云ひました。

『さあ、おあがんなんしよ！』

お母ちやんは、食べのこつた竹の皮の包みを、男の方へ押してやりました。六爺は、知らん顔をして握飯をたべてゐました。

青馬は、眞蒼な葉つぱの下をくぐつたり。日の當る間もなく、ひんやりした杉の木立をぬけると、頂きました。驚いて飛び立ちながら、おしつこをひつかけて、ヤンヂャン蟬が鳴いてゐました。

『おやす、足が痛えけ。てつぺんさついたら、休ませてやッかんね』

お母ちやんは、氣づかはしさうに何度も身をこゞめて、左の方の、おやすに聲をかけました。

『もう一息の辛抱でやんすよ』

六爺も、ときどき元氣のいい聲ではげましました。

おやすが五ッで、私が七ッでした。

たやすが足が惡いので、毎年夏になるとこの峠を越えて、瀧の溫泉まで湯治にいくのです。

『去年から見つと、道が惡いよだね』

『年々惡くなりやんさ、なんしろ、山水で荒されッかんね』

『これでも、一時までには着かれやんすけ』

『着かれんにも何にも、溫泉さつかつて、一杯やつて日のあるうち歸れやんさ』

お母ちやんと、六爺はそんな話しをしてゐました。

時代警語

○深慮遠謀なれば幸福之に伴ふ……（スペークテーター）

世に運不運はある、その運不運は定まつて居らぬ、運が好くても餘り得意にならず、運が惡くても落膽すべきで無い、深慮遠謀を以て奮鬪を持ち續けたならば不運も必ず幸運となし禍が福と轉ずしむる事は出來るものである……

受驗生の母

（晩霞氏添削）

す　ま　子

敎へ子を導き給ふ師の君のあたゝかきこころ嬉しきろかも

風邪もひかず學び遊びてよろこべる子等の元氣をみつつ樂しき

學校のかへりおそしと街に出でて親ごゝろわれ子を待ちわぶる

湯も入らで夜毎机にむかふ子のこころいとしもしばしといへど

消息

△千葉氏より。其後は御無沙汰申上げて居ります私の童話集につき、いつも御盡力をいたゞきまして兵衛御厚志の程篤く御禮申上げます。今回も島田忠夫氏の御力添へを得て、『葱坊主』『地藏さま』の二冊を出す事となりました。

何分よろしく御願ひ申上げます、初めの計劃では一冊にする筈でございましたが販賣上の都合から二冊にして上梓することになりました。三月中旬にはお目にかけられる事と存じます。なほ別便で『トテ馬車』を御送りいたしました。萬々御芳志の程　千葉省三　三月一日

拈華微笑

戰友の復讐に猛然敵陣を衝く。

◇

血湧き肉躍る木村君の戰況通信

◇

學校入學志願者に知つて居て

二百の磐中卒業生に知つて居て

◇

石炭とさかな以外に石城で中等水溫むあすの日曜。郊外散策に可ならん

◇

貰ひ度い慘風悲雨の人生行路難

陰慘な世相に朗かな短歌會。兎角趣味の集りは床しい

社會の今日

（昭和六）

○

氣にかかる仕事は持てど春の街出て歩き度き夜頃となれり　村野　次郎

講談　俠艶　女長兵衛

東京　斯波南叟

（魚崎潮畫）

（一五一）

橋場の喜太郎も波彌が長兵衛の家に厄介になつて居たから、其顏は知つて居ります喜『さまア見やがれ斯

つて終つた、何でた樂が波彌を隱したかと云ふに、是れは菅沼勘十郎と好い仲になり、夫れが爲め表具師德岡宗慶から暇を出された程だのに、多情な勘十郎は近頃長田の後家政江にハマリ込み、お樂を袖にするらしい氣振が見えたので、嫉妬の餘り長田の家に騷動を起させ、政江に泣ッ面をさせやうと掛つたのだつた、隨分馬鹿な眞似をしたものだが、女の猿智惠では其んな事より外報復の手段が無かつたものと見えます、扨て長兵衛は橋場の喜太郎に波彌を背負はせて、直に跡部彦四郎の屋敷へ參る、跡部は親類會議を催して遂に政江離緣と云ふ決義を致し是成つたぞ、女を持たなくては世繼ぎが設けられない、シテ其女は何處のものだな』十『女は根岸に居る、近間の根岸の下屋敷は長田の伜の波彌と云ふ奴も行つて居たと云ふから、可なりな屋敷だと思つたらそんなものか』勘『全體何にお使ひなさるか』十『チト風の變つた好みで彼の邊が入用なのだ、イヤ菅沼貴公には話しても好い、實は承知の通り拙者は女は大嫌ひだ、何となくむさくるしく感じて側へ寄られるのも氣味惡い位だが此の頃其女の或者が好ましくなつたのだ！』勘『イヤーア是れは聽きものだな、水野が女を欲しい夫れで幾らか人間並みらしく成つたぞ、女を持たなくては世繼ぎが設けられない、シテ其女は何處のものだな』十『女は根岸に居る、近間のは長兵衛の力でございまし合をして見たい譯さ』勘『イヤーア是れは聽きものだな、水野が女を欲しい夫れで幾らか人間並みらしく成つたぞ、女を持たなくては世繼ぎが設けられない、シテ其女は何處のものだな』十『女は根岸に居る、近間の根岸の下屋敷は長田の伜の波彌と云ふ奴も行つて居たと云ふから、可なりな屋敷だと思つたらそんなものか』勘『全體何にお使ひなさるか』十『チト風の變つた好みで彼の邊が入用なのだ、イヤ菅沼貴公には話しても好い、實は承知の通り拙者は女は大嫌ひだ、何となくむさくるしく感じて側へ寄られるのも氣味惡い位だが此の頃其女の或者が好ましくなつたのだ！

本社の慰問に對する謝狀一束

129

滿洲から

戰友の復仇に燃えて 猛然敵の本據を陷る

八市入城直前の拂曉戰況 下

好間村出身　木村石三君

―私は曲二分隊として參加必死、努力、我歩兵砲の命中は實に見事でありました

◇流石頑強な敵となりました、蜘蛛の子を散らす樣に算を亂して我先きにと逃げ始める、歩兵は追擊に移る、此の時でありました、爆然たる音響と共に飛び來づた敵彈一發、曲一分隊の砲に命中、黑煙、暗黑二秒、三秒、噫々悲慘壯烈〇〇〇〇、砲隊長以下初め只愕然唖然、砲は粉碎され七名の死傷者は目もあてられぬ悲慘、四名卽死名譽の戰死、我等は

◇天を仰ぎ無念の男泣き悲憤の涙をぬぐ得なかつた、名譽の戰死とは云ひながら今は呼べど歸らぬ悲しき遺骨、たつた今迄元氣で戰つて居た戰友かと、そう思ふだにそう考へるだに小椋分隊長以下四名の戰死者に對し涙を禁ずる事が出來ません、思へば悲しく茫然として暫く軍律嚴しき中ではあれど失神せざるを得ませんでした、失神者の如く戰死者を擔架に載せて後方に搬ばせました、殘念ながら地獄足足踏んだが仕方ありません、復仇の念に燃ゆる我々一同の奮鬪は遂に酬あられ敵陣地を占領し午後一時半頃ハルビンに入城致しました、十日間も待ちに待つた日本國民は永い籠居から救はれ感涙して歡呼歡喜して歡迎し實に涙ぐましき光景を展開致しました。

占領後判明した事ですが赤系ロシア人が多數殊に赤系ロシア青年が多數反吉林軍に參加し我軍に敵對致した事です

◇市内は敗殘兵　赤系ロシヤ人、便衣隊横行し甚だ危險にて只今皇軍は市内の要所を警備治安維持にあたつて居ります、一方上海方面の形勢頗る重大の樣ですます、日本の正義は必ずや